

大鳥会長「このままだと間違いなく潰れる」

国立大学病院24年度決算 過去最大の赤字額に

国立大学病院全体の2024年度経常損益は285億円の赤字に――。
全国42大学44附属病院長で構成する国立大学病院長会議（会長＝大鳥精司・千葉大学医学部附属病院長）が7月9日、都内で会見を



危機感を表明する国立大学病院長会議の大鳥会長④ら

開き、2024年度決算概要を発表した。収益はコロナ禍後から回復し、収益合計では対前年度比547億円の増だったものの、費用を見ると、人件費303億円、診療経費436億円増加し、費用合計で前年度比772億円の大増。その結果、2024年度の経常損益は過去最大の285億円の赤字となった。赤字額は23年度（60億円の赤字）より悪化し、国立大学病院は深刻な経営難に陥っている。

会見で、大鳥会長は「もしこのまま国からの支援がなければ、間違いなく潰れる」と、危機感を表明。政府に対して補正予算による手当てや診療報酬の改定などを求めた。

また、「（病院の経営難の問題は）附属病院だけの問題ではない。大学法人全体の問題だ。一つの病院が毎年、20億、30億の赤字を垂れ流すと、その影響は法人本体におよぶ。そうになると、大学教員の給与が一切払えなくなる。人員削減や文系の学部廃止といった事態に陥ってしまう」と語った。

東京科学大学病院の藤井靖久病院長も「我々国立大学病院は研究や教育ばかりをやっていると思われがちだが、病院経営に関して自助努力は精一杯やっている。その中でこの状況だ」と説明。国や自治体による財政措置を訴えた。